

アートプロジェクトにおけるボランティアの参画に関する研究

藤原, 旅人

<https://hdl.handle.net/2324/4784622>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (芸術工学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	藤原 旅人		
論文名	アートプロジェクトにおけるボランティアの参画に関する研究		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 知足 美加子
	副査	神戸芸術工科大学	准教授 谷口 文保
	副査	九州大学	准教授 中村 美亜

論文審査の結果の要旨

本論は、芸術祭やアートプロジェクトにおけるボランティアやサポーターの在り方に着目し、ボランティアがサポーターとして参画する過程で生じる内容と可能性について論じるものである。まず文献調査や芸術祭を牽引してきた北川フラムや川俣正、芹沢高志への聞き取り調査等によって、芸術祭やアートプロジェクトにおけるボランティアやサポーターの歴史的経緯を整理している。次にフィールドワークとしてアートボランティアの組織化に携わり、参与観察、ヒアリング、主観評価から分析を行っている。その結果、ボランティアがサポーターとして自主性・主体性・積極性を育みながら、セルフエスティームを獲得するという変容過程を明らかにしている。

本論は、序論と本文六章、結論で構成されている。第一章では、日本社会におけるボランティア概念の文脈を、第二次世界大戦、高度成長期、災害復興などの区分から整理している。アートに関わるボランティアの起源を、社会教育や文化に関する公共施設支援を担った1970年代の市民ボランティアとしている。第二章では、芸術祭やアートプロジェクトにおけるボランティアの育成や教育のあり方について述べている。第三章では、8つの芸術祭のアートボランティアに関する運営の課題について考察している。第四～六章では「さいたまトリエンナーレ2016」のアートボランティア育成に関する参与観察について説明し、参加者のヒアリングや主観評価を分析している。さらに芸術祭後の参加者の変容について追跡調査を行い、ボランティアやサポーターとして芸術祭やアートプロジェクトに参加・参画することが、市民社会を豊かにするアソシエーションづくりに貢献する可能性を明らかにしている。

本研究は、芸術祭やアートプロジェクトの運営に必要な不可欠でありながら見落とされてきたボランティアやサポーターの存在に光をあて、その自己変容を明らかにした。本論の新規性は、アートにおけるボランティアやサポーターの意義が、彼らが段階的に成長発展していくことだけでなく、「居ること自体が影響を与え合う根拠」となるような「中動的参加」や「正統的周辺参加」にあることを見出した点にあるといえよう。

審査は、主査および副査：谷口文保准教授、中村美亜准教授によって行われた。審査において、芸術文化におけるボランティアやサポーターに光をあてた独自性と、その在り方が市民社会創造に結びつく可能性を示した点が評価された。また、本研究が長期間にわたる参与観察や聞き取り調査

と分析を積みかさねることで、芸術文化と社会の新しい関係性を導き出したことが認められた。

公聴会において審査員および参加者からの質問に対して適切な応答がなされ、審査の結果、芸術工学分野の学術的知識と実践能力が認められ、博士論文審査について合格とし、本論文は博士（芸術工学）の学位に値するものとした。